



天明四

甲辰初懷家

全



寺の暮のりのむこはありゆ善の
 いまかみけれむさうり結りをききけり
 おのまゝあゝゆのり窓のひらきよ
 心ぬれ市中の柳も参差とそそみえり
 海くみかしの梅も爛漫とそそみえり
 けりいれぬや時とそそみえり
 例の如懐印のふりてそそみえり
 の人こらせちり中とそそみえり
 ぬれをさうそけあめとそそみえり
 執りしゆを



甲辰春

去夜楼晋明識



天明四歲甲辰二月十日於春夜樓興行

俳諧之連歌

九董

苔の腔平か海や枯るる

菘根の小路くは春

ふ谷うつ等うさふおすむいぬ

家くの貫もさまうらう

けふは月をみよしとまのさし

酒あつめは舟の川うせ

如菊

正巴

松化

万容

自珍

縮ふ次高橋とさふくれ乃北

小錢もてを質をとる店

おつい母おもちし聲えしひ

蚊やり片を解くは餐

友のあや思つの子はけ飯のころ

庭くあしはく足の園

山伏平厄の呪とすはれと

はれと崩る新田の井戸

湖柳

菱湖

孤山

橋仙

魚赤

杉月

路曳

志逸

菩提寺にやをゆるんむの比 仙魯

伸して立ちて永き日の月 涼丸

志る屋ゆるむ神楽の太鼓をふる 楚山

屋よりと薫をぬれ 焚 半三

門並に下儀我より伝習油賣 柳水

冬羽田の喧嘩まのときも 素良

形骸にありてこといへも 雲裳

小判投也 盃乃中 因山

二三二人雪もふれあしと 忘 百歩

きのあとも聖をいそふへんれも 麥雨

西行の其上の句はとをうりて 也竺

獨 かくあし 太宰 鹿下

むちりかも土を造りての月 湖陸

風ひやくと 鯛を 楚尺

綿船の一番をを藤かきん 其韻

手平五日の天赦をうりて 貫山

紅^ウ 絞る 覽起の 袖を 折平 之兮

(三)

園も おく 安海 上京の 家 是岩

ほも さい 臨時の 茶湯 奥 安海 や 熊三

あな の 橋 雨 平 色 濃き 湖 虫

高取の 城 八と さい さい 花の 色 春 坡

千里 長流 水 志 つら 也 九湖

席上探題

琵琶 貞 (海) 流 仲る 夏 月 九湖

残る 雪も 布 孫の 杉 下 花 れ ち 魚 赤

人 ちよき 家 や 流 さい 門 並ひ 万 容

那を 焼 飯 かつ 下 山 中 や う 流 踏 曳

春の 衣 や 長 者 の 宿 の 鷄 こ ぶ 涼 丸

や 入 命 日 母 ちよき 産 物 の 搦 仙

日 子 落 雨 中 長 じり 春 の 草 自 珍

あゝ さい ちよき 年 の 衣 や 春 の 風 杉 月

蝶いよつを都の麦の中 湖柳
春の水にせんといふ翁の如 湖虫
舛の戸やとちうぬえも梅のむ 湖一
かすこい山を越れはうすみゆ 我則

清江一曲抱村流

背戸門の流をのぼる小鮎や 之兮
陽冬や沖よりなる角やう 熊三
を風やよこの川を横り吹 春坡

いよらちこを流にすもむも
おしりやなく侍にたもらむむ

雨の柳や中のみをらひ素心
半ちりし梅を付しり藪の中 志逸
二月やおのれ塩少の昆布 是岩
馬のこのこまのうしおすも 楚山
啼こむり水のやうく蛙の 孤山
後前ありてをを連し
りふけ席に連なる幸を
やえこの日記の似すよ筆さしめ 菱湖
おちろ月花ありやふるちの門 雷文
蝶くの佛百のものある世をちる家 魯仏

江梅や普徳あそこのまき芝居 如菊
春こ戸や海くまのこい臺所少車容
初午やととくつりもあつた九亀兮
こちをたてとほよも上るいらのなう米松
根芽つむもえらう蛙女下代

當日文音

春あそく都のこも忍た海外浪花女うめ
げやうとふ袖中染ん春の雪竹裏
者あそ酒屋の新の柳丹波かぬ仙骨

畑打くととふくくうや二日月田原也竺

同伏水社中

を風下江戸の相撲の紋や 湖陸
川菩薩の屯の杖や法忌の場 楚尺
みしれ管中梅うえあまる使ふ系 買山
春十郎はさふく宿の庭の裏 其韻
巨椋江のゆりく下梅あや批の花 鹿卜

同但馬社中

雨あうく内ハ終平文あたり 麥雨

旅又入姑冬も短し一衣 雲裳
いそぎや草履志みけく白田 煮良
恋猫や寝もくは窓のやれ 黒人
俎板に曳這のぼる薺 柳水
廣澤や泥うのりき春の水 半月
下崩や免遊了は足乃徳 百歩
汎ひりや小松の件を春の人 因山

寒郷

梅乃月春衣うつふ家うれ 晋明

其引

万歳や春いづくの門をら 鶴汀

扇中拂ふ袖の淡雪 晋明

雉子つ羽みしよまやがれおえ 花打

春真

はりのまは蝶の睡れるま昼外 鶴汀
紅梅やさくら木あを草あむお 屯打

村深し燕はるむ門むら 春夜

二月廿一日於春夜樓興行

俳諧之連歌

維駒

樹造の肩^{かた}に^もはるや雀の子

萩の芽^こ踏^ふと^も庭芝乃中 晋明

雨晴子^こ妻の^こを^もゆき^ははる^もう^ん 熊三

羽折^はる^てある^日の^とれの^月 我則

徭^い情^の菊^の節^句も^もさ^えく^し 正巴

新^あ酒^のみ^やし^せの中^の私 佳棠

三挺の駕^うり^りひる^播 春坡

難^た波^あり^ある^抱女 生憎 松化

老^の力^を刀^あり^けて^うき^とを^記 之^兮

暑^さふ^耐は^は黄^帷子 是岩

お^針ハ^園下^ほれ^てを^家 道立

角^ひ廻^り家^の 執筆

右一順下略

探題

宥の柳 川をせそりそみりり 外 道立
 春の糸く痒さと 探れも風かお 正巴
 若草のやあももうらえ 庭乃 隅 雉駒
 うげりあやむくと起る小牛は 佳棠
 里坊へ 借於の文やうい五把 之兮
 せ雀うつ呪のほろや南谷 熊三
 淀竹田とともを 蛙 やとぶかいつ 春坡
 暮のうは日を隣うらういのちり 松化

川の瀬のそりそり 谷のほいともか風 我則
 ちのうし日や火あよ巨燧の力をあはる 是岩
 枕を来くつ 数多よ 砂里かお 三巢

鳥中花あひ余りるね

春の情 満を^ぬ 之あうあう物 定雅
 春の糸や 祢宜の提し油筒 松洞
 麥畑中 徑出来り 春の水^{芭蕉庵下} 松宗

題晝寐

永キ日を羽織るあうう寐うらり 晋明

春興

養父入や襦袢干上は塙の梅 田福
剪豆子来てゆく蠅や祢土人像 月溪
砂靴く一二の谷や 春空をみ 如夢
花の世や日影うつろふにすれ水 毛條 田原
かゝる居て下るまゝあゝをや雀外 伊丹 東瓦
三巻ほこ啼てあつゝしき川 蛙 然者
いのち 草子 や垣根 中 なるく芥の音 楚煉
あつ月をよとせ鳥羽田の田螺とら 魚官

其引

春月や痘の子いとふ紅乃中 浪華 銀獅
巢の端 中 雨の燕のよこせたり、 邦洞
凡中の糸妹の中履みかたりたり、 持室

射客

我ハせき 中 凡にも山葵をききし、 舊國

訪僧房

古寺や春の雪降るに月夜 南了 素郷
春の霞あつゝ人ひとり 齋 サカ 比 重厚

其引

離

もとりあひ咳水増む春の雪 公甫
鶯の宿耳 日暮く蛙外 士川
去る梅子鳥立くりあは 久佳則
小瀧子怒るるや ちや巢の燕 士喬
雉子ゆやめやうらむ茶白山 士巧
青柳の枝のまのれよ 於蝶外 守嗣
よし神も難波の考の伎うそ 菊十
出代を濱まへ 送は 僕かれ 其朋

長子入も長い堤や 啼 蛙 南里

伏水あそ

船形よ水菜あつげを 梅見外 李イ
二日灸之日ハ子ころを^ぬ ころ後^ぬ 余郎

借座あ柳かんちの窓もあり ^{大津} 驥道

旅せよと神 徳ひますや 物な^{高砂} 布舟

曙の海といふ是あそ

紫耳 夜のぬるる春の海 ^{晋明}

其引

三つわらむ老もかくれてあ菜つみ来雨
は、濁りのふや洗ふ所溝水 二貞
うらむすう一節うこく柳も来之

春波と鞍馬みやけのおうそ吹杜口
あ乃雪蛙のはらう中消る臥
二、代目の紅梅咲を^ぬとくしより子曳
昔柳や芦の枯もあ立あうう 九祿

徳のこせん一折

之兮

紅梅乃宿のあるや石柏子

化粧の窓中馴し雛雀^{スズメ} 晋明

長キ日をこほりまじせり怨むむ

かこり白ふは黄昏乃月 之兮

情志れ石平一生そふ女昂甚

秋の神臥よ追人恐る 晋明

子あふ侍男の小袖くらめさる
 晋明
 キせるよほる下巻の浮舟
 之兮
 螢とふ江口の廓 宿まじし
 晋明
 雨のはつた乃降いあふとを
 之兮
 切棄る千筋の髪を香煙へ
 晋明
 もつともお尻の骨みくれ 箬
 之兮
 誰しのお月のほろとの影暗し
 晋明
 尿をあふへしてほろよ 秋の夜
 晋明

四十経る招女、低徳とて室をよ
 之兮
 おかもあるにも櫛の占いのし
 晋明
 花の幕張下、文を拵せはく
 晋明
 萱をわらも 蝶のくく寐
 晋明

餘興

宿をわら梅下けくま名しりり
 之兮
 元下馬板倉殿の簾おろぬ
 晋明

春奥

ふうふ日や二夜かゝる来る市乃人 管鳥
燃おて夢初へおれえかほみ人 文皮
鶯ひ二日来ありす 野小 舞園
眠の足踏こもりや 春乃水 社焚
帰丁内をじろろ名跡かた 徳野
人形ももる旅病や傀儡師 心頭
初冬や淺簪しあゝの溜り水 五雲

其引

如月やうらむすの巻 研す持 伏水 賀瑞
勢ふく流夢や如月の雨の森 淀 幾由
柳そくた妻ハ蘇乃け 湖南 巨洲

題り

義仲寺僧

板敷 物おや糸抱廻る披溝の座 沂風
春寒花軟遅

信濃

花ころや丘のまゝの芝うら 江戸 踏人
つゞ其はのほいも昔の巨燧 成美

足もとの氷はなほゆるりて帰原十四 芦江

生憎の法印の羽織おほら月サハ山 荒堂
うらみずの啼きこゝろやと石 古真

春夕

原も春の夕暮りこゝろや 晉明

白日静

遊糸のやいと志つるも 松の風
あれそ来し袴ゆるりや春のあゝ

洛りありて題を撰る

さかづきのもの流れたり春乃川辰華 不二
我いぢの鏡ひくけと嵐と色 蝶夢

古真

天津繪の思もちかげも春をこゝろ 園文
切てははなもなれやいのほを尾陽 暁臺

書伝

鶯や洛りもはれず奇麗と東都 蓼太

歌仙行

おのこ目とこふ度中へりしり
春坡

おとほりまて伊谷あふ海元
晋明

増築く山もと近く春園へ
良典

く海らせり竹の志とた
坡

空の月子狐の施りくち存ひ
明

布子羽打を脱てあつける
執筆

甲撥や古き蝦治屋、提乃音
坡

江湖の溜り干茶すつて
明

けあも又神のつるをくそんし
坡

鷗羽を干しは晴壺の釜
、

緒りして高勢舟をさあを
明

おのひのものつ米を賣れ
、

またののちか、朝の月波さ
坡

きかうをたれと肌をよぶ志
、

百兩の路金をばすのほをしや
むの都の片をうまひ
えおろせとくみくつはむ仁王門
坊のあひらきかげらふのころ
鋸も錐もありを垣ゆるふ
隣りの猫をみくむぬれ
鶏のきこゆしつる鳥り籠
神さむくしつかた乃侍

うらあみいさむ絶を女夫中
志とらう中矢る短束の種
はまのふに横はるあふまれはり
あけ織ゆる窓乃油らむ
たの紀子に俚語放言も半く玉
枯えしと拾ふ玉川の菰下を女
新世流る世ふのほ乃月の照
ふかひあはらむ夕暮しの君

あまのつとをわたりて
栗毛の跡かたなり
繪戸戸石以下乃の嘉
あまのつと一日ハ解
さうやうこの様
藤はく社山
の
央

洛北書林摘仙堂梓行



昭和十二年四月四日
初稿
中
文
原
稿
に
よ
る

